

# 長者伝説の成立と背景

—<sup>よなぼる</sup>米原長者伝説を中心として—

西 住 欣 一 郎（歴史公園鞠智城・温故創生館）

## 1 はじめに

私が鞠智城跡の発掘調査を担当することになったのは、平成7年度(第17次調査)であった。それから平成12年度(第22次調査)まで継続して、発掘調査を行った。鞠智城跡の発掘調査に携わったことで、米原長者伝説の存在を初めて知った。

その時は長者伝説の内容を深く考えず、聞き流すような状態であった。しかし、ある出来事から、深く関心をもつようになった。それは読売新聞に掲載された米原長者伝説に関わる記事を読んだことである。

その内容は次の通りである。当時の清和高原天文台の名誉台長宮本幸男氏は、米原長者伝説の起源を、伝説に出てくる「太陽の後戻り」という一節に着目し、この現象は日食であると結論付けた。パソコンで逆算し、1061年6月20日の日食が伝説の起源とした（読売新聞1999）。この記事を見た当時の私は、非常に興奮し、感動したことを覚えている。しかし、発掘調査等の業務の多忙さから、長者伝説に係る考察について、一步踏み出すことができずにいた。

それから、十数年後の平成27年、再び、鞠智城の業務に従事することになった。職場である歴史公園鞠智城・温故創生館の新聞記事のスクラップ集の中から、先述した読売新聞の記事を偶然に見出し、再会したのである。

この偶然の再会は定められた運命とでも言うべきもので、私の探求心は米原長者伝説と鞠智城との関係に傾いていった。そして、熊本県生涯学習推進センター主催の「平成28年度くまもと県民カレッジリレー講座」で話すテーマとして、米原長者伝説を選択した。平成28年10月25日、くまもと県民交流館パレアで開催された講座で話した内容をベースにして、今回、このような形でまとめることにした。

## 2 米原長者伝説について

米原長者伝説の内容は大きく次の三つに分けることができる。その概要をしてみる（菊池市高齢者大学1991）。

### （1）観音様のご利益

京の都のお姫様の夢枕に信仰していた清水寺の観音様が現れ、肥後国菊池郡の小三郎という男に嫁ぐようにとのお告げがあった。お姫様がその男を訪ねてみると、薦を編んで貧しいその日暮らしをしていた。それで、お姫様は小三郎に小判三枚を渡し、買い物を頼んだ。その道中、鴨を見つけた小三郎は捕獲しようと小判三枚を投げつけた。しかし、鴨は逃げてしまい、小判を失った。その状態を見たお姫様が呆れると、小三郎はそうに金色に光るものは、裏山の炭焼き窯に沢山あると言った。二人がそこに向かい、金の石を拾い、大金持ちになった。これが米原長者の若い頃に大金持ちになった経緯である。

## （２）長者の宝くらべ

米原長者は小作人六百人、牛馬千頭も持つ大金持ちであった。ある時、山本村の駄の原長者と宝くらべをすることになった。米原長者は米原から宝くらべの場所までの三里の道に黄金の板を敷き、金・銀・珊瑚・錦などを並べた。一方、駄の原長者の宝ものは正装した息子二十四人、娘十五人であった。宝くらべの当日、見物人は駄の原長者の子ども達の所に集まり、米原長者の宝物には関心を寄せる者は少数だった。米原長者は負けを認め、「うらやましい」と泣いた。

## （３）一日田植え

米原長者は三千町の水田の田植えを毎年一日で終わらせることを自慢にしていた。ある年のこと、田植えが終わらないのに日没になった。米原長者は金の扇で太陽を招き返して、田植えを続行した。しかし、それでも田植えが終わらないので、日の岡山の頂上で油を燃やして明かりを確保して田植えを終わらせた。

その晩、長者の屋敷で働いた人達を集めて酒盛りをしている最中に、空から火の玉が降り注ぎ、屋敷や倉が焼け落ちてしまった。太陽を招き返したことで天罰がくだり、長者は没落した。今も、米原長者の屋敷があった所からは焼けた米がでてくるといふ。

## ３ 長者伝説成立背景の検討

### （１）民俗学の成果

#### ①小野地健氏の研究（小野地 2006）

上記２で述べた米原長者の伝説は、日本民俗学の研究では「朝日長者」、あるいは「日招き長者」と総称されている伝説に含まれている。代表的なものとして次のようなものがある。

#### 「湖山長者」 鳥取県気高郡湖山村（現鳥取市）

昔、産見の長者がいた。長者は田植えを一日で終えるために国中の者を集めたが、日暮れまでに終わらせることができず、金の扇で日を招き返した。翌朝、その田は全て陥落して湖となり、長者の財貨も消失したという。

#### 「日之丸長者」 三重県阿山群友生村（現上野市）

昔、日の丸長者がいた。田植えの時、沈む太陽を扇で呼び戻したら、翌朝その田は荒田になっていた。それから次第に家運が傾いたという。

#### 「犬神長者」 新潟県佐渡郡小木村（現小木町）

佐渡全体は長者の領地であった。ある年の田植えが日暮れになっても終わることができなかった。それで、長者は鶴ヶ峰に上り、軍扇で太陽を招き止めた。それから家は没落し、島を追われて船で逃げた。

これらの伝説と同様なものに金沢長者（静岡県）、宣田長者（三重県）、滝野長者・大久保長者（奈良県）、朝日長者（兵庫県）、朝日長者・柳田長者（大分県）などがあり、広く全国に分布している。

以上の伝説に共通する内容は、長者が一日で田植えを済ませようとする。しかし、途中で日没になったので、日を招き返して田植えを終わらせる。その後、長者は没落すると、いうものである。

小野地氏は「日を招く」というモチーフを時間論、王権論へと展開・発展させている。日を招き返して、支配を確立するという語りは、外部を独占し競合相手を排除し、自らを中心に据える王権の構造であるとまとめている。伝承については、時間・王権という問題を考察する視点として捉えている。

## ②大林太良氏の研究（大林 1983）

大林太良氏は日本の日招きの伝説には、上述した日招きによる長者没落伝説と日招きによって戦いに勝利する伝説とがあるとした。後者の代表的な例として、宮城県桃生郡桃生町の日招ぎ壇を挙げている。この伝説は昔、源義家が安倍貞任と合戦をした時、戦いが終わらないうちに日が沈もうとした。そこで、義家は壇の上に立ち、軍扇で日を招くと、日はまた昇った。この壇を日招ぎ塚という。

この伝説のように武将が日招きをした時、そのことが原因で武将が没落したとは語れていない。しかし、長者伝説では日招きの行為が原因で没落する内容となっている。これは武家社会において、武士と豪農とに要求される特長的な気風の相違が反映している可能性があると考えた。

さらに、長者没落伝説には東北地方から九州地方に至るまで、「朝日夕日の歌」が伴っているものが多いと指摘している。この歌の文句は全国的にみてあまりに似ているため、これを伝え広めていった集団の存在を想定している。その集団は鉱床を求めた人たちと考え、その時期は鉱業が盛んになった戦国時代から江戸時代初期の可能性が大きいとした。

## ③宮田登氏の研究（宮田 1992）

宮田登氏は長者没落の場面を語る伝説の中で、鳥取市の湖山長者の湖山池出現の様子は印象的なものとして取り上げている。その湖山長者伝説に匹敵する存在として、熊本県米原長者伝説を位置付けている。

長者伝説に関する研究がこれまで数多く蓄積されている。その結果、長者に代表される地域社会の「小王」の存在に対して、長者伝説が一つの形式を表現していることが指摘できるとした。その点は長者の没落過程が強く主張されており、長者没落の原因が「日を招く」という時間の秩序に相反する行動をとったことにある。伝説が生まれた土地を支配していた長者は既にこの世には存在しないが、その存在を示す痕跡を残す事象が口づたえに伝承され、伝説として確立している。このことは優れた民俗的事実であるとする。その点で歴史学は長者伝説を歴史研究の対象とすることに否定的である。しかし、伝説と歴史の関係はひとえに民俗的歴史の中で論じられるべきものと考えられる。つまり、長者の存在を成立させている民俗的歴史というべき世界を確立させることが必要とした。

さらに、長者伝説の成立時期が特定できるものとして、鹿児島県川内市に伝わる日暮長者の例をあげている。宮田氏はその成立時期を中世末と考えている。

## （2）鞠智城跡での考古学の成果

### ①鞠智城跡の位置と環境（木村 2012）

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫する7世紀後半、朝鮮半島南西部において開戦した白



村江の戦い（663）に敗れた大和朝廷が、唐・新羅連合軍の日本への侵攻に備えて西日本各地に防衛拠点として構築した古代山城の一つである。現在確認できている古代山城の中では、最も南に位置している。

その城跡は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する一級河川菊池川（総延長 72km）の中流域、山鹿市、菊池市の市境に位置する。鞠智城跡は菊池川河口から直線距離で約 27km 遡った箇所が存在する。県境の筑肥山地の主峰、八方ヶ岳（標高 1,052 m）南西麓に形成された丘陵地帯の南端近く、標高約 145 m の台地状の丘陵上（通称；米原台地）に、鞠智城は立地している。他の古代山城と比較すると、立地する箇所の標高が低い。その台地の南側には、菊池川沿いに発達した肥沃な菊鹿盆地が広がる。この地は、古代律令制下、肥後国菊池郡に属し、城跡周辺に残る「木野」地名から、『和名類聚抄』にみる「城野郷」に比定されている。

鞠智城跡の城域については、古くから広域説、狭域説が論じられてきたが、現在では、狭域説の範囲の中で、西側・南西部の土塁線と南東部・東側の崖線で区画された周長約 3.5km、面積約 55ha、標高約 90 ～ 171 m の範囲を城域としている。その範囲は広域なため、山鹿市と菊池市に跨っている（第 1 図）。

## ②発掘調査の成果（矢野 2012）

鞠智城跡の発掘調査は、昭和 42（1967）年度に第 1 次調査を開始し、平成 22（2010）年度までに第 32 次調査を行ってきた。主な遺構として、72 棟の建物跡、貯水池跡、土塁、3 箇所の門跡を確認している。主な出土遺物には須恵器、土師器、瓦、建築用材があるが、付札木簡、百済系銅像菩薩立像は特筆すべき遺物である。72 棟の建物跡については、Ⅰ期～Ⅴ期の時期区分を行い、変遷を考察している。時期区分はⅠ期（7 世紀第 3 四半期～第 4 四半期）、Ⅱ期（7 世紀末～8 世紀第 1 四半期前半）、Ⅲ期（8 世紀第 1 四半期後半～第 3 四半期）、Ⅳ期（8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 3 四半期）、Ⅴ期（9 世紀第 4 四



第 1 図 鞠智城跡航空写真（南東から）



第2図 鞠智城跡米倉復元建物（南から）

半期～10世紀第3四半期）である。各時期の特徴は次のようになる。Ⅰ期は創建期であり、城としての必要な機能を備えた段階である。掘立柱建物で構成されている。Ⅱ期は隆盛期で、出土遺物が最も多く、多くの人員が配置されたと考えられる。掘立柱の八角形建物や総柱建物が築造されている。Ⅲ期は転換期であり、掘立柱建物が小型礎石の建物に建て替えられ、食糧の備蓄機能が主流になる。この時期は出土遺物の空白期である。Ⅳ期は変革期で、大型礎石の建物に建て替えられる。また、貯水池の維持管理が行われなくなり機能が低下する。Ⅴ期は終末期である。この時期は城全体の機能が低下するが、食糧の備蓄機能は継続している。Ⅰ期～Ⅴ期までの建物の総数が72棟である。それらの中で、倉として利用されたのが総柱建物である。掘立柱の総柱建物跡が11棟、礎石の総柱建物跡が18棟確認されている（第2図）。これらの建物跡で火災がおこり、炭化した米が多量に出土している。このことから、これらの倉の殆どは米を貯蔵していたと考えられる（第3図）。以上のことから、鞠智城が築造された米原地区には、米を貯蔵していた古代の倉が数多く存在していたことは歴史的事実である。



第3図 鞠智城跡出土炭化米

### （3）文献史学の成果

長者が誕生するには、私有財産としての土地を所有するのが前提と考える。また、米原長者の「米原」は地名である。それで、ここでは土地所有制度上と米原の地名成立から伝説の背景を検討してみる。

#### ① 荘園の成立と展開（永原 1998）

永原慶二氏は荘園の成立と展開について、次のように三時期に分けて考察している。

- a 成立期：8世紀後半～12世紀末頃
- b 展開期：12世紀末～14世紀中頃
- c 動揺・解体期：14世紀後半～15世紀末頃



荘園の最終的消滅は 16 世紀末の太閤検地期と考えている。

初期荘園の始まりは、律令国家のもとで行われた墾田永年私財法(743)である。その後、諸大寺の墾田規模が定められ、各寺の開発の取り組みが展開される(749)。

これらには、既墾地や未墾地が含まれており、荘園の中に住み着いている荘民がいたわけではない。荘地と荘民が殆どの荘園でそろった形になるのは、11 世紀～12 世紀以降のことである。

土地に対して私的権利を進展させていこうとする社会各層の動きは歴史の中で、根強いものがある。この流れが活発化するのが 10 世紀以降であり、この現象を裏付けるものが史料上に新しく現れる「私領」と「職」である。「私領」は国へ官物を納入する義務が存在するが、私人が土地を直接管理し、「売田」として土地の賃借料をとる権利も認められている。「郡司職」などの用語はその地位が財産として扱われ、譲与の対象とされるようになった。このように、官職が事実上、私財された状態を「職」といつている。

また、荘園の展開期には地域性が発生している。その概要は次の通りである。各地の在地領主は自ら開発した「私領」を核として、権門との関係を維持し、周辺の公領を分割し、取り込んだ。いわゆる寄進地系荘園は 12 世紀に飛躍的に拡大展開した。この荘園で見られる中央領主と在地領主との関係は全国共通でなく、多様性が存在しているので、以下のように三つに分類した。

「畿内」型荘園：畿内では大規模寄進地型荘園よりも、狭い面積したもたない荘園が多く存在している。

「東国」型荘園：東国では、開発領主の寄進で成立する寄進地型荘園が広く展開した。中央支配層と寄進者である在地領主との力関係は、後者の優位が顕著である。

「西国」型荘園：「東国」と同様に寄進地型である。東国との相違点は次の通りである。

- a. 中央領主と在地領主との力関係は均衡していた。
- b. 東国御家人に移住に伴う新地頭と旧来からの在地領主との二重支配構造になっている。

以上のことから、12 世紀以降には寄進地系荘園の在地領主としての土地所有が成立していた可能性が高いと考えることができる。

#### ②米原の地名成立について(北本 2017)

北本氏は『菊鹿町史』掲載の文献史料から地名としての「米原」に関係するものを抽出し、その検討を行っている。その成果から、「米原」の最も古い使用例は「福田兼親軍忠状写し」に登場する。その年代は永徳元年(1381)である。

このことから、「米原」の地名成立は 14 世紀後半以前とすることができる。

### (4) 天文学の成果

#### ①宮本幸男氏の研究(讀賣新聞 1999)

鞠智城にまつわる米原長者伝説の起源について、「太陽が後戻りした」との表現は日食以外に考えられないと直感したのは、平成 11 年当時の清和高原天文台長の宮本幸男氏であった。宮本氏はパソコンに鞠智城の位置を入力し、7 世紀後半から 11 世紀頃までの期間、世界中で起きた日食の中から、田植えの時期、午後に観測され日没前に太陽が欠けたなど

の条件に合うものをピックアップした。その結果、1061年6月20日の日食が符合した。データ上では、午後2時57分に太陽が欠け始め、約2時間10分後に元通りになった。午後4時7分、太陽の79%が欠けたのがピークであった。

米原長者伝説の起源を日食に求めたのは、宮本氏の研究成果であり、それに使用したのは独自の計算式である。今日では、誰でもどこでも机上でパソコンを用いて、手軽にデータ解析が行える。PCハードウェアの向上と各種フリーソフトが充実しているからである（作花2010）。宮本氏が研究を行った当時は、相当な専門性がないとデータ解析が不可能であった。宮本氏の研究にはすばらしいものを感じる。

## ②最近の研究

日食は太陽が月によって覆いかくされる現象である。日食は太陽と月が地球から見てほぼ同じ方向に並んだ時に起こる。日食には皆既日食、部分日食、金環日食の三種類がある。皆既日食は太陽が月に完全に覆われ（第4図）、部分日食は太陽の一部が月にかくされ（第5図）、金環日食は月の周りから太陽がはみ出す（第6図）。日食は地球上のどこでも観察できるものではない。皆既日食が見られるのは、太陽光が届かずに完全な日かげとなる、限られた範囲内である。部分日食は月の日かげとなる広い範囲で見ることができる（世界天文年2009）。

未来のことを具体的に、精密に予測できるのは天文学だけである。このことを最も表しているのが日食の予測である。その方法は計算の元となるベッセルの日食要素を適用する。

まず、観測地点の緯度・経度・標高などの準備計算を行い、日食計算の主要部の観測地点と月の影の位置計算をする。この結果を元にして、日食の始まりと終わりの時刻、欠ける方向や食分等を計算する。

これらの計算はパソコンを用いて容易に行うことができ、今ではエクセルなどの表計算ソフトも利用できる（藤沢2009）。

天文学の進展により、インターネットのサイトでも日食の検索ができるようになった。「日食ナビ」のサイトには西暦1年から西暦3000年までの皆既日食や金環日食を各県の県庁所在地ごとに一覧表にまとめている。その一覧表の中から、上記2及び3で取り上げた長者伝説伝承地で起きた過去の皆既日食と金環日食を抽出したのが第1表である。また、西暦1年から西暦3000年までの間に皆既日食や金環日食が起きた平均値を算出している。3000年間に起こる回数は、皆既日食が6.3回、金環日食が9.3回で、何年に一度起こるかの数値は皆既日食が480年、金環日食が324年である（日食ナビ）。

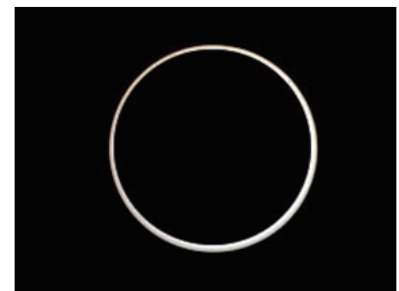
第1表を見ると、長者伝説伝承地では過去に皆既日食や金環日食が起きており、その現



第4図 皆既日食



第5図 部分日食

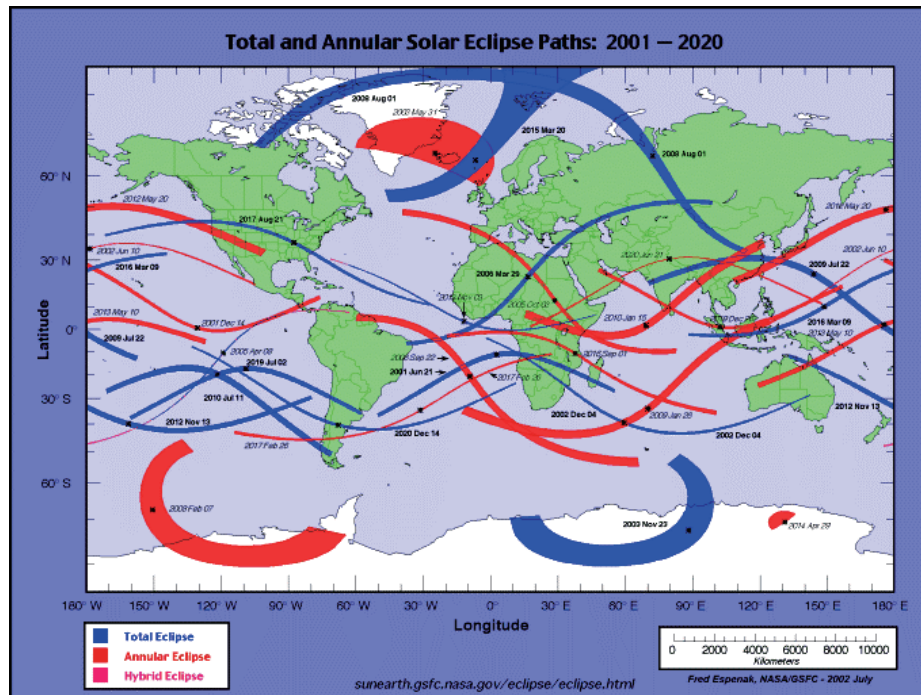


第6図 金環日食

第 1 表 長者伝説と日食日

伝説	県名	皆既日食日付	金環日食日付	日食の場所
米原長者	熊本県	4 5 4 年 8 月 1 0 日	1 6 8 年 1 2 月 1 7 日	熊本市
		1 0 9 4 年 3 月 1 9 日	3 0 8 年 1 1 月 3 0 日	
		1 2 4 9 年 5 月 1 4 日	6 4 1 年 1 月 1 7 日	
		1 2 7 5 年 6 月 2 5 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	
		1 2 7 7 年 1 0 月 2 8 日	1 1 0 7 年 1 2 月 1 6 日	
		1 7 4 2 年 6 月 3 日	1 2 4 5 年 7 月 2 5 日	
		1 7 6 0 年 6 月 1 3 日		
朝日長者	大分県	4 5 4 年 8 月 1 0 日	1 6 8 年 1 2 月 1 7 日	大分市
		1 0 9 4 年 3 月 1 9 日	3 0 8 年 1 1 月 3 0 日	
		1 2 4 9 年 5 月 1 4 日	6 4 1 年 1 月 1 7 日	
		1 2 7 5 年 6 月 2 5 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	
		1 7 4 2 年 6 月 3 日	1 1 0 7 年 1 2 月 1 6 日	
			1 2 4 5 年 7 月 2 5 日	
湖山長者	鳥取県	5 2 2 年 6 月 1 0 日	1 4 5 年 8 月 2 5 日	鳥取市
		9 7 5 年 8 月 1 0 日	1 6 8 年 1 2 月 1 7 日	
		1 7 4 2 年 6 月 3 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	
		1 8 5 2 年 1 2 月 1 1 日	1 1 0 7 年 1 2 月 1 6 日	
			1 7 3 0 年 7 月 1 5 日	
朝日山長者	兵庫県	5 2 2 年 6 月 1 0 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	神戸市
		9 5 9 年 1 2 月 3 日	1 2 1 0 年 1 2 月 1 8 日	
		1 7 4 2 年 6 月 3 日	1 7 3 0 年 7 月 1 5 日	
		1 8 5 2 年 1 2 月 1 1 日	2 0 1 2 年 5 月 2 1 日	
滝野長者 大久保長者 柳田長者	奈良県	1 8 5 2 年 1 2 月 1 1 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	奈良市
			1 7 3 0 年 7 月 1 5 日	
			2 0 1 2 年 5 月 2 1 日	
日之丸長者 宣田長者	三重県	1 5 8 年 7 月 1 3 日	6 5 3 年 1 1 月 2 6 日	津市
		1 8 5 2 年 1 2 月 1 1 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	
			1 7 3 0 年 7 月 1 5 日	
			2 0 1 2 年 5 月 2 1 日	
金沢長者	静岡県	5 7 4 年 5 月 9 日	1 4 6 年 8 月 2 5 日	静岡市
			6 5 3 年 1 1 月 2 6 日	
			1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	
			1 1 7 3 年 6 月 1 2 日	
			2 0 1 2 年 5 月 2 1 日	
犬神長者	新潟県	1 5 4 年 9 月 2 5 日	6 8 0 年 1 1 月 2 7 日	新潟市
		2 7 3 年 5 月 4 日	1 0 8 0 年 1 2 月 1 4 日	
		5 2 2 年 6 月 1 0 日	1 6 1 5 年 3 月 2 9 日	
		1 1 1 5 年 7 月 2 3 日	1 8 8 3 年 1 0 月 3 1 日	
		1 4 1 5 年 6 月 7 日		
		1 4 6 0 年 7 月 1 8 日		
		1 7 4 2 年 6 月 3 日		
		1 8 8 7 年 8 月 1 9 日		





第7図 日食帯

象が起きる時期が11世紀～13世紀に集中していることが分かる。さらに、米原長者伝説伝承地の熊本県と朝日長者伝説の大分県では、13世紀の日食現象に特異なことが起きている。熊本県では皆既日食が3回、金環日食1回、合計4回も起きている。大分県では皆既日食が2回、金環日食が1回、合計3回である。これらは皆既日食・金環日食の起きる平均頻度と比較すると、起きる回数が多く、集中していることが指摘できる。

また、皆既日食や金環日食はかなりめずらしい現象であることは、次のことから言える。2001年～2020年に世界で見られる皆既日食と金環日食の分布を示したのが第7図である。この分布図の日食帯の範囲内でないと、日食は観察できない（日食ナシ）。このことから、上記に述べた13世紀の熊本県や大分県での日食集中現象は特殊な現象であると考えられる。

長者伝説に共通している日招き行為は、その起源を日食に求めた宮本氏の考えには驚くべき発想力を感じる。当時の人々は太陽が一度沈み、再び昇ると感じるには、日食時の暗さが必要である。日食の時、周りはどれくらい暗くなるかの問いに国立天文台は次のように回答している。皆既日食の時には明るい星が見えるぐらいの暗さになり、日が沈んでから約20分～30分経過した状況と同じ程度である。部分日食では食分が50%程度より大きくなると、薄雲が出た時のような暗さになる。食分が大きくなるほど暗さは増していく（国立天文台）。

2009年7月22日、種子島～奄美大島の間で皆既日食が起こった。第8図は奄美大島で撮影された皆既日食が始まった直後の写真



第8図 皆既日食の状況

で、この写真を観察すると、全体が確かに暗い。このような状況であれば、長者伝説が生まれる当時の人々は太陽が沈んだと勘違する（画像集）。

#### 4 まとめ

ここでは、長者伝説成立の背景を検討したものを項目ごとにまとめ、最新の研究を見つめる。

##### （１）民俗学の成果

米原長者伝説と同様な伝説は日本各地に存在しており、「日招き長者」伝説と総称されている。これらの伝説には次のような共通する内容がある。①長者が一日で田植えを終わらせようとする。②その田植えの途中で日没になる。③一度沈んだ太陽を招き返して田植えを終わらせる。④その後、長者は没落する。

「日を招く」行為は、競合相手を排除し支配を確立させることである。それで、「日を招く」という伝承のモチーフは、時間・王権を考察する時の視点として有効なものである。また、地域社会の「小王」の存在が長者伝説として確立しており、優れた民俗学的事実である。歴史学は長者伝説を研究対象とすることに否定的である。しかし、伝説と歴史の関係は民俗的歴史の中で考察を深めることが重要であると指摘している。

長者伝説の成立時期については次のように考えられている。大林氏は、長者没落伝説には、「朝日夕日の歌」が伴う現象が東北地方から九州地方に至るまで存在している。これらの歌の内容の類似性から、鉱床を求めた人たちを共通する伝達集団として想定でき、その歌の成立時期を戦国時代から江戸時代初期と考える。また、宮田氏は鹿児島県川内市の長者伝説が成立時期が特定できるとし、中世末とした。

##### （２）鞠智城跡での考古学の成果

鞠智城跡は熊本県山鹿市、菊地市の両市に跨って存在する古代山城である。発掘調査の成果から、城の存続年代は7世紀後半から10世紀後半である。この期間に城内に築造された建物跡は72棟であり、そのうち、倉として利用された総柱建物跡が29棟確認されている。これらの建物跡で火災が起こったものから、炭化した米が出土している。このことから、米を貯蔵した倉が鞠智城跡に存在したことが明らかになった。

鞠智城跡内には、現在も集落が存続している。その集落の名前は「米原」であり、長者伝説の長者の呼称名称そのものである。この集落の周辺では、古代山城の米を貯蔵していた倉が朽ち果てて存在しなくなっても、炭化した多量の米を目にすることができた。このことは、古代山城の存在が忘れ去れた後に、多量の米を蓄えた長者の存在を想定させたと考えることができる。「米原長者」伝説の成立背景に、歴史的事実としての鞠智城跡の米を貯蔵した倉の存在が大きな要因として考えることができる。

##### （３）文献史学の成果

文献史学からのアプローチとしては、土地所有制度と「米原」の地名成立の時期について考察を行った。

土地を私的所有に所有する過程を文献史学の成果から検討を加えた。具体的には荘園の成立と展開の考察を行った。その結果、10世紀以降に土地の私的権利の萌芽が見られ、

12 世紀以降に寄進地系荘園の在地領主としての土地所有が存在したと考えた。

また、「米原」の地名成立に関しては、文献史料の検討を行い、14 世紀後半以前と想定した。

#### （４）天文学の成果

米原長者伝説にある太陽が後戻りしたとの表現は日食以外に考えられないとしたのは宮本幸男氏である。それで、日本各地の長者伝説伝承地と日食との関係を検討した。その結果、両者には密接な関係があり、長者伝説伝承地では、11 世紀から 13 世紀にかけて皆既日食、金環日食が集中していることが明らかになった。さらに、特異な現象が米原長者伝説伝承地の熊本県と朝日長者伝説伝承地の大分県で起きている。それは 13 世紀に皆既日食・金環日食の起きた回数が熊本県で 4 回、大分県で 3 回もあることである。

長者伝説以外で日食と歴史的な事象を検討した研究がある。太陽神である天照大神が岩戸に隠れ、世界が真っ暗になったとの記述が古事記・日本書紀にある。この中の特徴的な二箇所の記述は、皆既日食現象が伝承として残ったものと、二人の天文学者は考えている。一つは「長鳴鳥を聚めて、互いに長鳴せしむ」である。皆既日食で暗くなると、鳥や獣は騒ぎ出す。特に鶏（宇治谷 1988：長鳴鳥は不老不死の国の鶏）は甲高い声をあげる。もう一つは「細に磐戸を開けて窺す」である。太陽である天照大神が瞬間的に姿を見せる。これは皆既日食が終わる瞬間に太陽が月の周縁から光を放つ、ダイヤモンドリング現象を表現したものとした。さらに、日食が挿話とともに、伝承や歴史として残る時の条件として、次の三つを設定している。①日食が皆既または金環であること。あるいはそれに近い深い日食であること。②重要な歴史的イベントが同時に生じること。③歴史的なイベントの観察者がいること。また、重要なイベントの典型例は戦争とした（谷川 相馬 2010）。

#### （５）最新の研究（堤 2016）

堤克彦氏は菊池川流域に残る「足野長者」・「駄原長者」・「米原長者」の三長者伝説の歴史的関係や成立時期について検討を行っている。堤氏は「史実」、「伝説」、「昔話」の三者は密接で、重要な相関関係にあると考えている。その関係は「史実」が伝承過程で「伝説」となり、最終的には「昔話」という形で、「史実」が展開していくというものである。つまり、「伝説」・「昔話」の成立背景には歴史的事実が存在するということである。

さらに、伝説の成立時期については、足野長者伝説・米原長者伝説には長谷寺・清水寺の「十一面観音信仰」が関与している。また、公家が娘を地方豪族に降嫁させるのは平安末期（11 世紀後半）と言われている。このことから、三長者伝説の成立時期は、平安時代末から鎌倉時代前半（11 世紀後半～12 世紀前半）と推定している。

#### 4 おわりに

長者伝説の成立と背景を検討するために、民俗学・考古学・文献史学・天文学の各成果を用いて考察をおこなった。

民俗学の成果は地域社会の「小王」の存在が「日招き長者」伝説として確立した民俗学的事実とすることができ、その成立時期としては、戦国時代から江戸時代初期と中世末の二通りの考え方がある。

考古学の成果としては、7世紀後半から10世紀後半にまで存続した古代山城である鞠智城跡には米を貯蔵した倉が築造されていた。この倉が存在した歴史的事実が長者伝説の大きな成立背景と考えられる。

文献史学では土地の私有地化と地名成立時期を考察した。土地の私有地化12世紀以降に確立し、「米原」の地名は14世紀後半以前と想定した。

天文学では長者伝説の太陽が後戻りする現象は日食が深く関わっており、伝説伝承地と皆既日食・金環日食との相互関係が密接であることが明らかになった。伝説成立時期に関与した時期として、皆既日食・金環日食が集中して起こった11世紀から13世紀が考えられる。

四種類の検討結果をまとめると、長者伝説の成立時期は11世紀から17世紀の幅がある。土地の私有地化が長者の前提であるので、12世紀以降の時期が絞りこめる。さらに、天文現象の関与を加味すれば、13世紀以降に長者伝説が成立した可能性が高くなる。

また、長者伝説は堤氏も考察したように、その成立背景に歴史的な事実が大きな要素として存在していると考えることができる。さらに、その成立背景に皆既日食・金環日食の天文現象が重複して関与し、伝説として残ったと想定できる。

#### 【参考・引用文献】

- 宇治谷 孟 1988『日本書紀（上）全現代語訳』講談社学術文庫
- 大林太良 1983「第1章 太陽と火」『太陽と月』日本民族文化大系 第2巻 小学館
- 小野地 健 2006「日招き伝承 考」『神奈川大学人文学会誌』158号
- 画像集 2009.7.22 皆既日食 <http://www.f3.dion.ne.jp/~p2k/090722.html>
- 北本裕子 2017『『福田兼親軍忠状写』の中の「米原城」について』『鞠智城研究』第2号
- 菊池市高齢者大学 1991「米原長者」『菊池むかしむかし』青潮社
- 木村龍生 2012「第Ⅱ章 位置と環境」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 国立天文台 2009 <http://www.nao.ac.jp/phenomena/20090722/faq.html>
- 作花一志 2010「過去未来の日食探索」『天文教育』1月号（Vol.22 No.1）
- 世界天文年 2009 <http://www.astronomy2009.jp/ja/webproject/soecl>
- 谷川清隆 相馬充 2010「『天の磐戸』日食候補について」『国立天文台報』第13巻
- 堤 克彦 2016「江田船山古墳出土大刀銘と菊池川流域三長者伝説の試論」『研究紀要』第46号 熊本県高等学校地歴・公民科研究会
- 永原慶二 1998『莊園』日本歴史叢書 吉川弘文館
- 日食ナビ <http://eclipse-navi.com/index.html>
- 藤沢健太 2009「日食の計算」<http://www.astro.sci.yamaguchi-u.ac.jp/~kenta/eclipse/>
- 宮田 登 1992「Ⅲ王権と時間 6 長者の没落と死」『日和見』平凡社選書143 平凡社
- 讀賣新聞 1999「8月23日の夕刊讀賣新聞の記事」